

第7回国際忍者学会大会発表要旨

根津潜龍濟の人物像と潜龍院の成り立ちについて

国際忍者学会会員 根津光儀

天正10年(1582)武田家没落間際の軍議において、上州への退避を提案した真田昌幸が勝頼のために岩櫃城の搦手にしつらえた御殿は、その後本山派の修験寺、潜龍院として明治17年(1884)まで続いた。昌幸から御殿を拝領したとされる潜龍濟・潜龍院についての先行研究は非常に少なく、『岩島村誌』『吾妻郡城塁史』『根津・禰津家家歴と系譜』の一部に記載が有るが、基礎資料として潜龍院九世幸清法印の顕彰碑文を元に、『加沢記』『真田家御事蹟稿』等を分析したものである。

この稿で取り上げる基礎は、論者自身の家に伝わっていた古文書「遺書之事」と潜龍院跡に現存する墓石を詳しく調べて解った事と、それ故に深まった大きな謎について公開し論証したい。画像データとして「遺書之事(付翻刻)」と「潜龍院跡墓石群」他を提示する。真田家に関する資料として、「長国寺殿御事蹟稿(真田宝物館蔵)」や「本藩名士小伝(長野県立歴史館蔵)」「御當家廃古諸家略系(長野県立歴史館蔵)」等は公開資料である。「遺書之事」は正保4年(1647)に初代専龍院幸繁が隠居後、一人称で語った自身の家系であり、嫡子明廣が書き留めた文書である。ここに書かれている事と「潜龍院跡墓石群」の構成は一致しており、「遺書之事」には一定程度の信憑性があると言える。初代大漣院殿峯山青雲大居士根津小治郎直家から五代定津院殿竹拽英賢大禅定門根津光直までは、根津氏他家系図と概略的に合致している。しかしながら六代不徳院殿直元常安大居士松鶴軒常安が、天正3(1575)年長篠の戦いにて討死とされており、極めて不自然である。松鶴軒常安は天文10年(1541)美濃守信直と名乗り海野平の合戦で破れその後武田信玄に臣従し信玄と共に出家し松鶴軒常安を名乗っている。武田家没落後徳川家康に臣従している、『加沢記』。年齢的には真田幸綱と同年代と考えられるが長篠で討死はしていない。松鶴軒の嫡子が長篠で討死にし、法名が月峯常圓であることは、根津氏他家系図にもあり「遺書之事」と大きな齟齬はない。家康に召し抱えられた松鶴軒は、天正18年(1590)家康が関東に移封されると上野豊岡に5千石を知行された。家康は鷹使いの名人であった松鶴軒を重用したのである。「遺書之事」は曾祖父にあたる松鶴軒を不徳院殿直元常安大居士と諡している。菩提寺である八幡山月光院常安寺(高崎市所在)には、月光院殿心源常安居士として祀られている。ここに専龍濟の屈折した心情があり、昌幸から岩櫃城に招かれるまでの前半生が滲んで見える。

専龍濟の年齢は、天正3年(1575)に10歳と仮定すれば、神川の合戦を20歳で体験し、岩櫃城へ赴いたのは27歳となる。祖父である松鶴軒常安が家康によって、天正18年(1590)に上野豊岡に配され、孫である専龍濟が翌、文禄元年(1591)に昌幸によって岩櫃城搦め手に配置されたのは、徳川方に対する諜報活動の期待であったと考える。潜蔵坊と呼ばれた人物(来福寺左京)との人事異動として岩櫃城へ赴いた専龍濟は、前任者の業務を引き継ぎ諜報活動に従事し、拠点としての専龍院を開いた。

以上「遺書之事」に記された根津専龍濟大炊久直の人物像である。官途名、大炊は医食同源の道に長けているという自負であろうか。潜龍院は江戸期、修験寺として宗教活動のほか配下の根津一族とともに、医業や寺子屋などの民政に携わった。 以上

注記 文字使用について

* 「遺書之事」において潜龍院は専龍院と表記され、江戸期の宗門改には潜龍院と表記されている。

* 「遺書之事」において松鶴軒の鶴は鷗に近い文字でかかれ、他家系図においては鷗・鷗・鶴などと記されている。

注記 先行研究と参考文献

* 『岩島村誌』（岩島村誌編集委員会）昭和46年発行

* 『吾妻郡城堡史』（山崎一・山口武夫）昭和47年発行

* 『根津・禰津家 家歴と系譜』（根津清）平成10年発行

* 『鷹書と鷹術流派の系譜』（二本松泰子）平成30年2月7日発行

* 『真田家の鷹狩 鷹術の宗家、禰津家の血脈』（二本松泰子）令和5年1月9日発行

関東忍びの歴史を追う 今も伝えている甲賀武田忍法体術

古武道研究会明神館
甲賀武田忍法相伝家
21代早坂義文(號覚禅齋)

甲州武田家で生まれた甲賀武田忍法は、開祖、武田信虎公の叔父油川で、得度して武田厚雲齋と号し、甲賀流の祖、甲賀三郎望月一族より、甲賀流の技法を学びました。

しかし、戦国の世、甥信虎と争い破れるも家臣団の板垣信方、飯富虎昌に、その技法が伝わり、三者衆など所謂「甲州乱波」といわれた特殊な集団を形成していきました。

信玄公の情報収集、謀略法など戦国最強といわれる武田軍団が組織されました。

18代小林小太郎先生の口伝帖に「忍びとは、すなわち、謀、破壊と工作なり」と記載されており、信玄公が使う忍びの集団に杣人と御師(富士山岳修験者)など地域に根ざした人物、さらに、金山衆、根来衆、吾妻衆など特殊な技術を持つ集団を配下に抱えて、様々な破壊と工作を行いました。

さらに、信玄公の側近で影武者も務めた真田源太左衛門信綱が七人の忍びを抱え、信玄公の周辺を守りました。

また、もう一人の信玄影武者が、武田逍遙軒信綱です。

武田家滅亡後、この流儀を継承した武将は、真田昌幸と高坂弾正昌信でした。

真田昌幸が生き延びたことにより、真田家が上州・信州に今も「忍びの伝」を伝えているのです。

そして、高坂弾正がまとめた資料などの書き付けが江戸時代の甲州流・甲陽流など様々な流儀の源になり、新たに、軍学などの分野が確立しました。

そのあとを継いだのが、長谷川善兵衛時芳で、色々な忍術関係書を残し、「秘伝書」「義経流之法」「戸ノ手裏剣免許」などの伝書も残っています。

十五代藤本銀之助は、江戸湯島天神切り通りに住む法印行者で、16代高野源八郎、17代平本峰洞と続きます。

平本は、大正3年、千代田の皇居において、天皇陛下の御前で忍法の妙技を披露しました。

加來耕三氏の著書「武術・武術家列伝」においても「二人の墓仙人」との記述が掲載されています。

そして、小林小太郎は、昭和11年5月「甲州武田神社の大祭の夜」に平本氏より、免許皆伝を受け、18代目を継ぎました。

戦時中は、特殊工作員として、諜報活動をし、門弟の柏浦貞治覚道も特殊工作員として活動しました。

戦後は、小林も柏浦も合気系武術と古い唐手の技を組み入れ、甲賀武田忍法体術として青少年に護身術の指導をしていました。

しかし、両人の後を継承した前原清三は、現代武道と古武道とを両立することはせずに危険な技でも、これを残さなければならないと、隠し武器の使用法や仕込みの伝に使われる小太刀の技・縄抜けの技、手裏剣の打ち方などを私に伝授して、この流儀の代を継がせてくれました。

氏名 岩田 明広
発表題目 松平大和守家の忍びについて
発表要旨

近年、幕藩体制下の忍びの実態が証拠に基づいて把握されるようになってきた。本報告では、これまで断片的な記述に止まってきた結城松平大和守家の忍びの実態を概観し、今後の研究方針を提案する。

松平大和守家は、徳川家康の次男で、豊臣秀吉の養子を経て結城晴朝の養子になった羽柴秀康（結城秀康）を祖とする。秀康が北庄藩主となり成立した越前松平家から、秀康五男の直基が結城家の家督を継いで分かれた。当主の多くが大和守の官職を得たことから、松平大和守家と呼ばれ、転封を繰り返したことで引越し大名の異名をとる。

松平大和守家には、元禄11年（1698）から明治2年（1869）までの藩政記録『前橋藩松平大和守家記録』（群馬県指定重要文化財、405冊）が残されている。この記録は、命令や処分・報告の写し、幕府との連絡状況、藩の日常動向等を、日毎毎に用番家老が記したものだ。現在までに前橋藩時代の記録に加え、川越藩時代の記録の極一部が翻刻・刊行されている。また、他に元家臣宅に残された文書類も少なからず存在する。

松平大和守家の忍びについては、川越藩時代の「川越城下圖」での確認が知られているが、封ぜられた地域の郷土史料として藩政記録が閲覧されたため、早くから姫路・前橋・川越の各藩時代の地域史研究に記載があった。しかしそれらの記録は、藩政史の些細な不詳の事実として埋もれ、着目されることはなかった。現在、その全体像を把握するため、刊本の調査を終え、忍び記録の大部分を占める未解読部分の調査を進めている。

以下、今日までに把握できた情報を研究動向に則して示す。

【名称】忍之者または忍

【雇用】寛文年間に姫路の場所柄で出雲から招聘（遡るか）

【組織】人数：初期8名以上、幕末4名程度か

組織：大目付・勘定奉行一番頭—忍取次—忍之者—子供役—忍方足輕

【姓】芦野・有田・井山・尾勝または尾衛・亀岡・布沢・三田・山下・山本・渡部・武田

養子：片平・藤平・丸平・田代

【身分】徒目附・徒士・鷹匠の下、太鼓役之者・御茶坊主・足輕小頭の上

【居所】侍屋敷内（前橋・川越）、江戸、相州

【相続】世襲、名跡・遺跡相続あり（届出制）

【給与】寛文七年：米三拾俵三人→文政九年：三拾壱石三人扶持

【職務】軍事、藩主の道中警固、祭礼・興行の警固（対家中）、情報収集・探索（幕府の依頼もあり）、有時の出兵の手配（人数出し）

【探索】他所の一揆・転封予定先等

【稽古】忍之者がそれぞれ行う独自の武術稽古（忍器の使用の証拠は未発見）

松平大和守家の忍びは、名称・雇用・身分・職務等が本家福井藩越前松平家に類似する。また、公儀隠密の探索活動期間に先立って探索活動が始まり、公儀の依頼による探索もあったことから、徳川将軍家を含む松平氏全体での情報機関の連携の可能性も示唆する。

今後の研究は、松平氏の情報機関や幕藩体制の構造解明を意識して進めることが肝要だ。

題名：神君加太越えにおける忍者の足跡を追う～甲賀ルート選択の背景

1582年(天正10年)本能寺の変が勃発、家康一行は無防備のまま神君伊賀越えに挑むことになる。諸説ある逃避ルートのうち甲賀ルートを選択した背景にはその先の加太越えに備えて兵力を結集する必要があった。今回は6月4日に一行の走破した距離(約150km)がそれまでの距離とは比較にならないほど長いこと(高速移動)や、小川城で練られた作戦が終点の岡崎までを網羅する軍事作戦であったことを踏まえたうえで、古文書やフィールドワークをもとに加太越えにアプローチする。早朝に小川城を出発した家康一行は一刻も早く三河に帰還するためには畿内の出口である亀山関を目指す必要があった。その行程を読み解く記録として、家忠日記には、「此方御人数雑兵共二百餘うたせ候」、神祖泉塚記事には「上柘植より鹿伏兔の宿に至る三里半の間、深い険阻にして、元来山賊の住家也」がある。これらは加太越えがいかに大変であったかを物語る史料として示されている。しかしこれらは“どこをどのように通ったのか？忍者がどのように活躍したのか？”が不明であり、現在の大和街道が逃走ルートであるとの知見に疑いがもたれることなく現在に至っている。そこで、今回は忍者目線で論理的科学的な推論を交えて、この加太越えについて見直し、地域住民の協力を得て一行が通ったと思われる古道を新たに発見したので発表する。発表項目として、

1. 考えられる3つのルートの詳細

①現在の大和街道を東進(北ルート)②現在の太田湖を突破(中ルート)、③馬場谷から名阪国道加太トンネル真上の峠越え(南ルート)が考えられ、①②はいずれも現在の加太北在家、③は中在家を通過する。しかし①は江戸時代以降の街道開発、③は名阪国道の大規模造成によって消滅。

2. 山賊(雑兵)と遭遇したと考えられ、難所と思われる2つの峠についての考察

②での考察をすすめると、太田山付近とその後の錫杖ヶ岳付近の峠あたりが難所。

3. 加太越え全容(スタートとゴール)、またその標高差についての考察

現時点で加太峠越えとは、江戸時代の古地図を参考にすると、上柘植から北在家→市場→梶ヶ坂→向井→越川→久我→福徳→萩原、そして関町の古厩までの古道を発見。

4. 加太越えの先、白子浜につながる新たなハイウェイの発見とその意味

亀山市歴史博物館と昼生まちづくり協議会の調査で古厩から鈴鹿市岸岡(白子浜直前)まで、中世に築かれた“金王道(こんのみち)”という尾根道を繋げたハイウェイが存在し高速移動を可能にする。

5. これらの事から見えてくる忍者の足跡と現在の末裔たちの存在について

狭所での戦闘における忍者の格闘優位性や説得工作の必要性、一ツ家や中在家には戊辰戦争にも参戦した忍者の末裔(大原家)らが出て、後世に峠の警備を任されたと推測する。

参考資料(神君伊賀越え全ルート)



<神君甲賀伊賀越え移動距離比較>
6月2日:堺→飯盛山(約30km)
6月3日:飯盛山→小川城(約70km)
6月4日:小川城→岡崎城(約150km)

<6月4日の大まかなタイムスケジュール>
午前 4:00~5:00 → 10:00~11:00 → 15:00~16:00 → 18:00~19:00
小川城出発 → 徳永寺到着 → 白子浜到着 → 大浜到着

第7回国際忍者学会・大会 自由発表 発表要旨（修正版 20240708）

氏名 大塩泰史（おしおひろふみ）

自由発表 STEAM 教育の視点で忍者・忍術を学ぶ「シン・忍者展」

2024年4月20日（土）～6月23日（日）愛媛県総合科学博物館で特別展「シン・忍者展～忍術を科学で学べ～」が開催されました。私たちは、この企画展において愛媛県総合科学博物館、日本忍者協議会、三重大学のご協力のもと企画・展示制作・運営計画を行いました。

小説や漫画・アニメ・映画で超人的な能力を持つ忍者は世界中で愛され人気を博していますが、忍者の実像を紹介する資料は少なく謎の多い存在です。近年、学術研究が進み、忍者の実像と日本各地での忍者の動向が明らかになってきています。

STEAM 教育とは、Science(科学)、Technology (技術)、Engineering (工学)、Art (芸術・教養)、Mathematics(数学)の文系・理系の枠を超えた5つの領域で横断的に学び、探究のプロセスを通して課題を解決するために必要な資質・能力を育成する取り組みです。

「心・技・体」の総合的な力を持つ忍者。古文書等で伝えられた忍者の実像を STEAM の視点で科学的に検証。パネル展示、映像、体験装置により理解・探求し、現代社会を生き抜くためのヒントとして応用できるような展示づくりを行いました。

今後の忍者を紹介する展示制作での視点と課題を模索する機会となるよう、この企画展の様子をご紹介します。

●「シン・忍者展」の内容紹介

- ・開催地（愛媛県）における忍者の活動
- ・STEAM 視点での展示構成とパネル展示、映像、体験装置の紹介
- ・忍術試験場～忍者マスター認定・体験で得た暗号からメッセージ解読「わ・れ・を・し・る」

●企画展の来場者・スタッフのご意見・ご感想の紹介

●今後の忍者をテーマにした企画展制作における視点と課題について

